埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド／ザ・ウエスト』論：クエンティン・タランティーノとセルジオ・レオーネのおとぎ話（１）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド, ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウエスト, クエンティン・タランティーノ, セルジオ・レオーネ キーワード (En): Once Upon a Time in the Hollywood, Once Upon a Time in the West, Quentin Tarantino, Sergio Leone 作成者: 西山, 智則 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000055

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド／ザ・ウエスト』論
― クエンティン・タランティーノとセルジオ・レオーネのおとぎ話（1）―

A Study of *Once Upon a Time in Hollywood / the West*
The Fairy Tale of Sergio Leone and Quentin Tarantino (1)

西　山　智　則
NISHIYAMA, Tomonori

はじめに―マンソンのいる歴史

2019年、クエンティン・タランティーノ監督は、ヒッピーのカルト集団マンソン・ファミリーによるシャロン・テート殺害事件を扱った『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』（『ワンハリ』と表記）を公開した。1969年８月９日の深夜、事件は起こった。『ローズマリーの赤ちゃん』（ロマン・ポランスキー、1968年）の高層マンションで悪魔崇拝者たちに狙われるローズマリーの恐怖を描いたポランスキーの妻で妊娠中の女優シャロン・テートたち五人が、チャールズ・マンソンをリーダーに悪魔を名乗る集団によって惨殺されたのである[1)]。1934年に生まれ、犯罪を繰り返しては刑務所に収監されていたマンソンは、1967年に出所すると、自分がイエスを意味する「人の子（マンソン）」だとして、親と不仲だった家出少女たちを集め、誰もが平等で自由だと主張するマンソン・ファミリーを結成し、かつて西部劇が撮影されたスパーン牧場で共同生活を送る。音楽プロデューサーのテリー・メルチャーを通して、マンソンは音楽の道を目指すが挫折する。

マンソンはビートルズの「ヘルタースケルター」（1968年）を曲解し、黒人と白人の最終戦争が起り、黒人が勝利するが、自治ができない黒人たちがマンソンを頼り、彼の王国が成立すると予言した。1969年７月25日、マンソンと三人は金銭的諍いから知人ゲイリー・ヒンマンを殺害し、壁に「政治豚」と血で文字を書き、黒人政治組織ブラックパンサーの仕業に見せかける。そして、マンソンの右腕テックス・ワトソンと三人の女は、８月９日の深夜、元テリー・メルチャー宅に引っ越したシャロンたち五人を銃やナイフで惨殺した。10日夜にはブラックパンサーの連続殺人事件を装い、マンソンたち七人はラビアンカ夫妻を殺害し、壁に「豚に死を」、冷蔵庫のドアに綴りを誤って「ヒルタースケルター」と血の文字を書いた。死刑が廃止されたカリフォルニアの刑務所で、マンソンは2017年に心筋梗塞で死亡する。マンソンたちの逮捕はヒッピーの「時代の終焉」だった。

キーワード：ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド、ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウエスト、クエンティン・タランティーノ、セルジオ・レオーネ
Keywords　：Once Upon a Time in the Hollywood, Once Upon a Time in the West, Quentin Tarantino, Sergio Leone

そして、事件から半世紀後の2019年、タランティーノの『ワンハリ』が上映された。落ち目のTV映画スターのリック・ダルトン（レオナルド・ディカプリオ）、リックの専属スタントマンであるクリフ・ブース（ブラッド・ピット）、リックの家の隣に住むシャロン・テート（マーゴット・ロビー）、三人の人生が流れてゆく。だが、タランティーノ好みの凄惨な事件が「再現」されるかと思いきや、殺されたのはシャロンらではなく、隣の家に侵入しリックとクリフに返り討ちにあったマンソン・ファミリーだった。歴史改変映画『イングロリアス・バスターズ』（2009年）のなかで、閉じ込められた映画館でヒトラーたちが焼き殺されるという逆ホロコーストを描いたタランティーノらしい。マンソンは消された。なお、未公開映像では、マンソンはポランスキー邸を訪れてテリー・メルチャーが住んでいるかと聞き、シャロンと一瞬話している。「昔々ハリウッドで」というタイトルの『ワンハリ』において、タランティーノはいかなるおとぎ話を綴ったのだろうか。

1．マンソン映画症候群―リアリティという病

これまでシャロン・テート殺害事件は数多くの映画化されてきた。最初のマンソン便乗映画は、家族間に悩みを抱える裕福な家の娘がロックシンガーと関わり、彼が家族を操ろうとする『地獄に堕ちた者たちの邪教』（ロバート・トム、1969年）である。若者のドラッグやセックスを描くヒッピー映画だが、最初の『天使よ、天使よ、我々は落ちゆく』という題名を『地獄に堕ちた者たちの邪教』に変更し、「人喰い」「ドラッグ」「儀式殺人」「全ての人間は邪悪につくられている」などの言葉を加え、首吊り死体の生々しいポスターで宣伝したのである。また、ソフトポルノ映画の巨匠ラス・メイヤー監督の『ワイルド・パーティ（原題Beyond the Valley of the Dolls）』（1970年）は、シャロン・テートも出演し、芸能界に憧れた三人の女性たちの転落を描いた『哀愁の花びら（原題Valley of the Dolls）』（マーク・ロブソン、1967年）の続編として企画されていた。だが、その原作者が脚本を拒否したために、同様の筋でカリフォルニアにやって来た三人の女たちの運命を綴るコメディ映画をつくり、テート殺害に便乗して殺人事件のシーンを追加することになった。

カルト映画『スナッフ／SNUFF』（マイケル・フィンドレイ、1976年）もマンソン便乗映画である。映画の最後には、突然、映画スタッフたちに女優が殺され、それが撮影されるというシーンが展開する。この映像の殺人は実際に起きており、マフィアが撮影する「スナッフ・フィルム」と呼ばれる現実の「殺人フィルム」であり、FBIも捜査中の謎の作品として宣伝された。ところが、この映画は1971年にアルゼンチンで撮影された『スローター』という題の低予算スプラッター映画で、テート殺人事件の衝撃にあやかって最後の殺人シーンを追加撮影し、本物の「スナッフ・フィルム」の触れ込みで公開されたのである。

多くのマンソン映画は様々な設定をつくり、ドキュメンタリー風のリアリティを装った再現映像を採用している。TV映画だが有名な『ヘルタースケルター』（トム・グリース、1976年）は、マンソンの裁判が行われるという体裁で事件が再現されるが、焦点は裁判の行方に充てられている。『チャールズ・マンソン』（デヴィッド・ジェイコブソン、2002年）では、マンソンでなく信者たちのドキュメン

タリーを企画スタッフたちが制作するという設定で事件が再現される。ファミリー間での乱交や殺害シーンに多くの時間を割くポルノ的映画であり、企画スタッフがマンソンの信者に殺害されてしまうという結末になる。リアリティアを醸しだそうと質の悪い画面でドキュメンタリー風にインタビューを再現しているが、幻想の中でマンソンが角の生えた悪魔として現れ、リアリティが削がれている。

また、テート殺害事件に乗じて1971年に制作されたが公開されず、1978年トロマ社によってようやく日の目を見た『USA邪教集団―ファミリー』（ロバート・L・ロバーツ、1971年 ）は、実名ではないものの、マンソンをモデルにしたカルト的集団が快楽的儀式殺人を起こす様子を再現するポルノ的スリラーである。評価の高い『シャロン・テート殺人事件』（ロバート・ヘンドリクソン、1973年）では、実際の映像に再現シーンを織り混ぜて虚実混交のリアリティを狙い、さらにサイケデリックなアニメーションや映像が歪んだマンソンの心象風景を表現する。ホラー映画『処刑軍団ザップ』（デヴィッド･E･ダーストン、1970年）は、田舎の村にやって来て、鶏を生贄に捧げる悪魔崇拝の儀式を行うヒッピーたちが狂犬病に感染し、互いに殺し合うカルト映画で、ジョージ・A・ロメロの細菌パニック映画『ザ・クレイジーズ―細菌兵器の恐怖』（1973年）に影響を与えた。

現在でもリアリティを追求した多くのマンソン映画がつくられている。マンソンを語り手にした『ハウス・オブ・マンソン―アメリカが生んだ悪魔』（ブライドン・スレイグル、2014年）は、前半はマンソンを爽やかに描いた伝記映画である。『ワンハリ』前年の2018年には､『チャーリー・セズ―マンソンの女たち』（メアリー・ハロン、2018年）が制作された。女性カウンセラーが刑務所にいる三人の実行犯の女性たちから話を聞き、「チャーリーはこう言った」という洗脳から解こうとする設定で事件が再現される。女性や黒人への暴力が問題視される時代の映画らしく、暴力を使って捻じれた愛を教え込まれ、黒人は白人よりも劣るという偏見を信じ込まされたマンソン信者の女性たちを黒人カウンセラーが再教育する。『チャーリー・セズ―マンソンの女たち』の最後で実行犯の女レスリー・ヴァン・ホーテンが過去暴走族に誘われた時、スパーン牧場から逃げていればどうなっていただろうかと回想する。『ワンハリ』の「もうひとつの歴史」を意識した終わり方だろう。

少し変わった作品では､「パンク・スプラッター・パペット・ミュージカル」と称して、パンク･バンド「ランシド」のメンバーのティム･アームストロングが制作を務めた『リヴ･フリーキー！ダイ・フリーキー！』（ジョン・ロッカー、2003年）がある。3069年の荒廃した砂漠、ある男が『ヘルタースケルター』というマンソンの書いた本を拾ったという設定で、人形アニメーションによる再現がなされる。最後はその本に感動した男によってマンソンの教えが人類に語り継がれてゆくという爆笑のパンク・ミュージカルである。さらに、NBCのTVドラマ『アクエリアス―刑事サム・ホディアック』（2015年）は、1967年のロサンゼルスで家出した娘を捜索する刑事が、彼女がマンソンのコミューンにいることを発見し、潜入捜査が始まるというマンソンを使った刑事ドラマになっている。

ドキュメンタリーの制作も終わりがない。ヒストリー・チャンネルのドキュメンタリー『チャールズ・マンソンという男―マンソン

の肉声』（2017年）は、マンソンが残した肉声から他にも殺人事件を起こしていた可能性を探る再検証番組である。ワーナーブラザーズのドキュメンタリー『ヘルタースケルター―ハリウッド史上最凶事件の真実』（2021年）は、全６話の６時間に及ぶ最も長いものだし、六人のカルト教祖たちを追求した全６話のネットフリックス・ドキュメンタリー『カルト教祖になる方法』（2023年）の第１話はマンソンで、第５話が麻原彰晃、第６話は文鮮明を扱う。日本でもNHK BS プレミアム『ダークサイドミステリー』の「悪魔と家族のはざまに―チャールズ・マンソンの危険な誘惑」（2020年）では、獄中でマンソンが描いた絵や手紙がテレビ初公開され、手紙の「永遠の長い廊下」という言葉を、愛を求めたが閉ざされた彼の心象風景として読み解いた。

２．「世にもありふれた物語」としての『ハリウッド1969――シャロン・テートの亡霊』

数あるマンソン映画のなかで、『ハリウッド1969――シャロン・テートの亡霊』（ダニエル・ファランズ、2019年）は、陽気（ポジ）な『ワンハリ』を反転させた陰画（ネガ）として面白い。最初はドキュメンタリーを思わせる再現映像が始まるが、最後に捻りが加えられる。霊感が強いシャロンは、ロサンゼルスに家を借りて、ロンドンにいる夫ポランスキーの帰りを待っている。チャールズと名乗る男がこの家にテリーという男が住んでいるかと訪ねて来てから、飼い犬のサパースタイン（『ローズマリーの赤ちゃん』の医師の名をつけた犬で、『ワンハリ』でも登場する）が死んでいたり、家に侵入してきた悪魔を名乗る男に自分と友人が刺殺される夢を見たり、不穏なことが起こりだす。家に置かれたテープの曲は、逆に再生すると「ヘルタースケルター」と聞こえる。

誰かに監視されたり、一緒に住む人間たちも陰謀を企んでいるように感じ、シャロンは赤ん坊が狙われているという不安に陥る。周囲は妊娠による不調に過ぎないとなだめる。『ローズマリーの赤ちゃん』と同様に、主人公の妄想か現実か、判別しがたい恐怖が展開する。やがて、夢と同じように、シャロンと四人の知人はマンソン・ファミリーに襲われるが、シャロンたちは反撃して無事に助かる。ところが、全ては死んで亡霊になったシャロンの視点からの幻想（ゆめ）だった。五人は惨殺されて地面に横たわっているのである。『ワンハリ』はマンソン・ファミリーを殺した後に、リックがインターホン越しにシャロンと話をして、隣の邸宅のゲートが開き中に入るシーンで映画は幕を下ろすが、『ハリウッド1969―シャロン・テートの亡霊』ではゲートが閉まって、幽霊になったシャロンが「私はおとぎの国にずっと住んでいた」と語って映画が終わる。まさしく「悪夢のおとぎ話」だ。

この映画のエピグラフ「私たちの見るもの全ては夢の中の夢に過ぎない」は、米国作家エドガー・アラン・ポーの詩「夢の中の夢」（1849年）からであり、シャロンの体験した現実は死んだ彼女の夢だった。『ワンハリ』の陰画（ネガ）的映画である。「お前（自分）は既に死んでいる」という幽霊オチは、米国作家アンブローズ・ビアスの短編「アウル・クリーク鉄橋の出来事」（1890年）を原型とする。ちなみに、1913年メキシコで消息を絶ったビアスは、タランティーノ製作の『フロム・ダスク・ティル・ドーン３』（P・J・ピアス、1999年）では、砂漠のバーで吸血鬼たちと戦うことになる[2)]。「アウル・クリーク鉄橋の

出来事」で南北戦争時に鉄橋から吊るされようとする兵士は、綱が切れて川に落ち何とか家族の所まで逃げ帰る。しかし、それは死に際の幻想だった。この短編は1929年に９分の短編映画『橋』（チャールズ・ヴィダー）として最初に映画化されている。1961年にもロベール・アンリコ監督によって『ふくろうの河』の題名で映画になった。

1964年に『ふくろうの河』は米国TVドラマ『ミステリー・ゾーン』（1959年より放送）の第５シーズン22話として放送された。『ミステリー・ゾーン』は、TBS制作のTVドラマ『ウルトラQ』（1966年）やフジTV系列のドラマ『世にも奇妙な物語』（1990年より放送）にも影響を与えている。『ミステリー・ゾーン』では、潜水艦に撃沈される予感に怯える乗客が、自分がその客船を撃沈したドイツ軍人で、死後に罰として亡霊になり撃沈される側の恐怖を永久に味わうことを知る「審判の夜」（第１シーズン、第10話、1959年）、どこに行っても同じヒッチハイカーに遭遇する女性が自分が自動車事故で死んだことを悟る「ヒッチハイカー」（第１シーズン、第16話、1960年）、南北戦争後に夫の帰りを待つ妻や家の前を行進する人々は全員が死人だった「遠い道」（第３シーズン、第４話、1961年）のように、幽霊オチは使い古されてしまった。しかし、時にそれは古い館で恐怖に慄く母子三人の顛末を描く『アザーズ』（アレハンドロ・アメナーバル、2001年）のように、洗練されたゴシックとしてリサイクルされて蘇る。

「アウル・クリーク鉄橋の出来事」からちょうど百年、ベトナム戦争を背景にした『ジェイコブス・ラダー』（エイドリアン・ライン、1990年）が公開された。ベトナム戦争の帰還兵で幻覚に悩むジェイコブは軍の秘密を追求し、「梯子（ラダー）」を落ちるごとく怒りに陥る効果から「ラダー」と呼ばれる闘争本能の強化薬を軍が開発したことを発見する。だが、ジェイコブはラダーの影響で仲間同士が殺し合い既に死亡していたのだ。「ヤコブの梯子」は『旧約聖書』の「創世記」でヤコブ（ジェイコブ）が夢で見る天上に続く梯子だが、ジェイコブが階段を登るシーンで映画は終わる。幽霊オチや死に際の幻想という設定は、もはや「世にも奇妙な物語」ではない[3)]。「ふくろう川」の標識がでてくる山本弘の「生と死のはざまで」（『トワイライト・テイルズ―夏と少女と怪獣と』収録、2011年）は、怪獣に襲われた少年の死ぬ前の回想（ゆめ）物語である。死に際の夢オチは、『殺しの分け前／ポイント・ブランク』（ジョン・ブアマン、1967年）、『ルル・オン・ザ・ブリッジ』（ポール・オースター、1998年）や『ステイ』（マーク・フォースター、2005年）でも使われた。

また、アフガニスタン戦争に置き換えたリメイク版『ジェイコブス・ラダー』（デヴィッド・M・ローゼンタール、2019年）では、結末を変えた。アフガニスタンで兄アイザックを亡くしたジェイコブは、帰国後、退役軍人のための外科医になったが、現実と虚構が入り乱れる幻想に襲われながらも、兄アイザックは戦死しておらず、地下トンネルで戦争後遺症から逃れようとラダーの中毒に陥っていることを知る。だが、中毒者はジェイコブ、外科医はアイザックであり、全ては患者ジェイコブの幻想だったという夢オチで、前作のジェイコブが階段を登るシーンとは反対に、彼がビルから転落するシーンで映画が終わる。

幽霊オチで最も有名なのは、『シックス・センス』（M・ナイト・シャマラン、1999年）だろう[4)]。幽霊が見える子供のカウンセリン

グをする精神科医（ブルース・ウィリス）が、実は死んだ幽霊だったという結末は、「かつてない衝撃の新感覚派スリラーの誕生」と宣伝とされた。だが、「誕生」ではなく幽霊オチの「改変（リサイクル）」に過ぎない。シャマランはよく「盗作（パクリ）」が疑われる監督である。たとえば、『赤頭巾ちゃん』を下敷きにした『ヴィレッジ』（2004年）では、境界線の向こうに棲む怪物を恐れる閉鎖的な昔ながらの村に住む少女が、そこは社会から絶望した人々が暮らす区画に過ぎず、柵の向こうに現代世界が広がることを知るのである[5)]。この結末の『恐怖の獣人』（ロジャー・コーマン、1958年）との「類似（ぱくり）」は否めない。『恐怖の獣人』の原始的な生活を送る人間たちは、村の果ての禁断の世界に向かい、ここが核戦争後の地球だったことを発見する。『恐怖の獣人』の結末は、十年後の1968年、『猿の惑星』（フランクリン・J・シャフナー）が引き継いだ。猿が支配する惑星が未来の地球だったことが判明する、海辺に自由の女神が埋もれたあのラストである。

『ヴィレッジ』に似た筋のマーガレット・P・ハディックスの児童小説『ランニング・アウト・オブ・タイム』（1995年）からも盗作嫌疑があがった。だが、この類の物語は少なくない。母親と二人で古い館に住みその世界が全てだと信じる少年が、母親の死後向こうの町にでてゆき「僕は死んだんだ」とはしゃぐ米国作家レイ・ブラッドベリの短編「びっくり箱」（『十月はたそがれの国』収録、1955年）から、主人公トゥルーマンが自分の人生がテレビ中継されているリアリティ・ショーだったことを発見する『トゥルーマン・ショー』（ピーター・ウィアー、1998年）、南北戦争前夜と思しき奴隷が酷使されている南部の大農場が、過去の南部を再現したテーマパークだったという『アンテベラム』（ジェラルド・ブッシュ、2020年）など、反復される物語にすぎない。幽霊オチの末裔が「シャロンは死んでいた」という『ハリウッド1969―シャロン・テートの亡霊』であり、タランティーノは『ワンハリ』というおとぎ話で「シャロンは生きていた」と歴史を修正したのである。

3．もうひとつの『ワンス・アポン・ア・タイム』―セルジオ・レオーネと名前の物語

タランティーノは引用魔である。こっそり引用するシャマランと違い、タランティーノは分かるように引用し、新しい映画を創造する。これまでテート殺害事件を描いた映画は、ドキュメンタリーを模した再現映画か血や狂気を追い求めるホラー映画のような定型ばかりだった。だが、タランティーノの『ワンハリ』は少々違う。そして、『ワンハリ』を誕生させた似た題名の映画がある。タランティーノが愛してやまず、数々の映画の引用からできた傑作だ。『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウェスト』（セルジオ・レオーネ、1968年）、初回公開時の邦題は『ウエスタン』である（『ウエスタン』と表記）。マカロニ・ウェスタンの巨匠セルジオ・レオーネが念願の米国撮影を果たした作品である。同じ「ワンス・アポン・ア・タイム」という題名の関係しか見えない二つだが、そうではない。

2019年の日本では『ウエスタン』の165分版が再度公開された。戸川木純は、『ワンハリ』への便乗、レオーネ没後30周年のみならず、『ウエスタン』が「スクリーンに蘇える」のは、「誰かが当然行わなければならなかった、映画史的必然である」と断言する。さらに「タランティーノは『ワンハリ』を世に問うこと

で、69年のハリウッドを再現し、シャロン・テートを蘇えらせただけではなく、タランティーノ映画を紐解く鍵そのものでもある『ウエスタン』を、そしてセルジオ・レオーネをも現代に蘇えらせて、その再評価と再確認を求めるのである」と続けた［25－6頁］。『ウエスタン』は興行的に過去の三部作『荒野の用心棒』(1964年)『夕陽のガンマン』(1965年)『続・夕陽のガンマン』(1966年)ほど成功しなかった。だが、パリで二年間この映画を上映する映画館もあり、次第に評価は高くなる。『ウエスタン』という邦題は、西部劇のジャンル自体も意味し、「これが西部劇だ」とばかりに、マカロニ・ウェスタンなる「偽物」が「本物」になったことを宣言している。

1964年にレオーネは『荒野の用心棒』を世界中で大ヒットさせ、マカロニ・ウェスタンというジャンルを流行させた。しかし、『荒野の用心棒』は時代劇『用心棒』(黒澤明、1961年)を「盗作」したことで、東宝に賠償金と興行収入の15パーセントを支払うことになった。また、レオーネは『荒野の用心棒』でアメリカ西部劇を連想させるために、ポスターでは映画監督だった父の名前「ロベルト・ロベッティ」をもじった「ボブ・ロバートソン」の監督名を使った。「ボブ」は「ロバート」、「ロバートソン」は「ロバートの息子」であり、いわば「ロバート・ロバート」である。それはまるで「偽物」が「本物」になろうとするポーの分身小説「ウィリアム・ウィルソン」(1839年)を思わせる名である。今では「高名」なレオーネだが、その契機となった『荒野の用心棒』では「偽名」だったのだ。

そもそも、『荒野の用心棒』でクリント・イーストウッドが演じた主人公も「名無し」だった。それは『用心棒』で二つの勢力が対立する宿場で用心棒になる「名無し」の男(三船敏郎)が、桑畑を見て「桑畑三十郎」と名乗ることを意識している。『ウエスタン』のハーモニカという男も、彼の吹く楽器からそう呼ばれるだけで「名無し」である。さらにレオーネは制作と撮影にも手を貸し、モニュメント・バレーでも撮影された『ミスター・ノーボディ』(トニーノ・ヴァレリ監督、1973年)をつくりあげた。伝説のガンマンのジャック・ボレガード(ヘンリー・フォンダ)を倒して名をあげようと、影のように後を付け回す男(テレンス・ヒル)は「名無し(ノーボディ)」と名乗る。『ウエスタン』のパロディ的な『ミスター・ノーボディ』で、レオーネは「名無し」のキャラクターを完成させたのである。

さらに考えたいのは、タランティーノの『キル・ビルVOL.1』(2003年)で主人公が呼ばれる「ザ・ブライド」の名も、彼女が敵に襲われ意識不明になった時につけられた仮の名だったことである。ベアトリクス・キドーという名前が呼ばれるのは、『キル・ビル VOL.2』(2004年)で墓に生き埋めにされ復活した後からで、『キル・ビル VOL.1』の時点では伏字やノイズで分からない。「ザ・ブライド」という「名無しの女」の名はレオーネの「名無しの男」の系譜をなぞっている［コンラッド121頁］。1964年の『荒野の用心棒』で「偽名」の「名無し」の監督だった「ボブ・ロバートソン／セルジオ・レオーネ」は、今では世界の名前となった。レオーネの『ウエスタン』とタランティーノの『ワンハリ』。タランティーノが好んだ大量引用の技法を、レオーネは半世紀前に『ウエスタン』で既に敢行していた。過去の作品から大量に引用し、そのリミックスで独自の世界を創造したのである。

4．『ウエスタン』論―『真昼の決闘』と時間の詩学

『ウエスタン』の14分のオープニングは静寂に満ちた駅で幕を開ける。駅では三人の男たちがハーモニカ（チャールズ･ブロンソン）の乗る列車を待ち受けている。過去にフランク（ヘンリー・フォンダ）に殺された兄の復讐を果たすために、ハーモニカはやって来た。だが、ハーモニカの動機は最後まで明かされず、フランクにつき纏う謎の存在である。アメリカの正義を体現するフォンダが、鉄道開発の陰謀を巡らす黒幕モートンの片腕の悪党を好演している。唯一水がでるマクベイン一家の土地を相続するのは、ニューオリンズからマクベインとの結婚で西部にやってきた元娼婦ジル（クラウディア･カルディナーレ）で、彼女を無法者のシャイアン（ジェイソン・ロバーツ）とハーモニカがフランクから助けることになる。やがて、三人の男たちは皆ジルを愛してしまうのである。

映画が始まる駅ではフランクの手下の三人（ウディ・ストロード、ジャック・イーラム、アル・ムロック）がハーモニカを待ち受けている。この原型は『真昼の決闘』（フレッド･ジンネマン、1952年）である。保安官ケイン（ゲーリー・クーパー）に復讐しようと、正午（ハイヌーン）の列車で町に帰ってくる仲間を三人の無法者が駅で待っている。頻繁に時計が映しだされ、現実時間と映画時間の一致を示すリアリズム映画であり、ディミトリ・ティオムキンの主題歌『ハイヌーン』の「ドクンドクン」という音は、保安官の心臓の鼓動を模しているようだ。『ウエスタン』で、ニューオリンズから西部に到着した時にジルは、駅の時計と自分の時計の時間の違いに気がつき、フランクがモートンの手下に狙われる時には、看板に書かれた時計の絵にライフルの銃身の影が映り12時という「正午（ハイヌーン）」になる。スローな流れで進む『ウエスタン』では駅員が列車の「遅延」を書き込むが、『真昼の決闘』においては無法者が列車に「遅れ」がないかを駅員に聞き､「時間通り」であることを確認する。

『ウエスタン』の駅の三人に『続・夕陽のガンマン』の三人の主役クリント・イーストウッド、リー・ヴァン・クリーフ、イーライ・ウォラックを起用する計画もあった。『真昼の決闘』の駅の三人の悪役にまだ有名ではなかったリー・ヴァン・クリーフがおり、ハーモニカを吹いていたが、その重なりは興味深い。赤狩りを風刺した『真昼の決闘』では、見捨てた町の人々に対して保安官バッジを捨て「堕ちた星」を見せつけ、町を去る保安官ケインに、赤狩りでハリウッドを去った映画人たちの姿が反映される。だが､『真昼の決闘』と対極の『リオ・ブラボー』（ハワード・ホークス、1959年）では、周到に時計が画面から排除されおり［川本149頁］、アルコール中毒のジュード（ディーン・マーティン）がテーブルに捨てた保安官バッジを再び胸につける。さらに、「堕ちた星」の仕草は、『ダーティハリー』（ドン･シーゲル､1971年）で刑事のバッジを投げ捨てるハリー（クリント・イーストウッド）が再現している。

『ウエスタン』では従来のレオーネの映画のような観客を退屈させない「早いテンポ」ではなく、何かを待ちながら映画が「スローテンポ」で進む。最後の決闘の前にジルが「ハーモニカは何を待っているの」と言うが、登場人物が待つものは「遅れ」ても必ず到来する死だ。結核で余命のない鉄道会社のモートンは、歩けず車椅子に乗っていて、鉄道は

彼の足である。「モートン」の名の綴りには「死（モート）」が刻印されており、歩けないために生への執着として、線路という跡を残すのだ。モートンはフランクを裏切り、シャイアンたちに襲われて撃たれた後、列車から蝸牛のように水たまりへと這って死んでゆく。最後の決闘でフランクは「死神（ペイルライダー）」として白い馬に乗ってくるが、死ぬのはフランクである。シャイアンは撃たれ、復讐を果たしたハーモニカも荒野に去ってゆく。鉄道が開通する未来を見つめるジルを除き皆が消えて、西部という「時代の終焉」を迎えるのである。

5．続『ウエスタン』論―引用の荒野

『ウエスタン』には西部劇48本が引用されている。映画研究者クリストファー・フレイリングによれば、この映画が「レオーネ自身の言葉を借りれば、『個々の西部劇への言及』からなる一大モザイクとなっていることも決して不思議ではない。シネアストによるシネアストのための、真の意味でのポストモダニズム映画」なのである［288頁］。レオーネは本作を「すべてのアメリカ西部劇を組み合わせて、万華鏡で覗いたようなものにしたかった」、「ポストモダニストと呼ばれるテキスト配合」を行い、「本当の目的は、明らかな引用に気付いた観客たちにこの映画はどこかで見たことがあるぞ、と一度は思わせつつ、実際はこんなふうに物語が語られるのは一度も見たことがない、と悟らせることだった」という［279頁］。引用で溢れた『ウエスタン』を引用魔のタランティーノが愛するのもよく分かる。

たとえば、マクベイン一家がフランクたちに皆殺しされるシーンで、父親は飛び立つ鳥に不穏な空気を感じ取る。『捜索者』（ジョン・フォード、1956年）でインディアンに農家が襲われる場面を思いださずにはいられない。一家が殺害されると、長いコートを着た五人のガンマンが現れて、生き残った少年に近づいてゆくのをカメラが背後から捉える。そして、カメラは一人の男の顔の前へと回る。その男がフランクで、『荒野の決闘』（ジョン・フォード、1946年）において保安官ワイアット・アープを、『12人の怒れる男』（シドニー・ルメット、1957年）では有罪とされた少年の裁判を覆す陪審員８番に扮したアメリカの良心の衆徴ヘンリー・フォンダが演じている。『怒りの葡萄』（ジョン・フォード、1940年）で大資本に土地を奪われた家族の息子役のフォンダが、資本家モートンの手先になって土地の略奪を企むのだ。

主人公が奏でるハーモニカは、『大砂塵』（ニコラス・レイ、1954年）のジョニーが抱えてるギターを模倣している。ゆっくり演奏される彼のハーモニカは、哀愁ではなく不吉な調べを帯びる。『リオ・ブラボー』のトランペットを使った「皆殺しの唄」を意識した作曲家エンニオ・モリコーネは、「この作品で私たちはとうとう『皆殺しのトランペット』から解放されたんだ」と語った［フレイリング304頁］。世界最初の映画『ラ・シオタ駅への列車の到着』（リュミエール兄弟、1895年）を念頭に置き、列車が駅に入ってくるオープニングで映画が始まり、レオーネの名のクレジットが踏切のように降りて列車が止まる。『ウエスタン』は「列車の到着」で始まり、線路の開通で終わるのだ。冒頭の列車を下から撮るアングル、労働者たちが鉄道を敷く工事シーンは、『アイアン・ホース』（ジョン・フォード、1924年）へのオマージュである。『アイアン・ホース』では工事に携わる中国人た

ちが好意的に描かれるが、『ウエスタン』の最後でも鉄道の労働者たちに敬意が払われる。

この映画の登場人物たちは「死の舞踏」をゆっくりと踊っている［フレイリング313頁］。1969年の日本公開時のポスターには、「凄まじいこの決闘交響曲は、静寂という序曲から始まる」という文句も踊っていた。駅の扉が開いて映画は始まる。しかしながら、それまでのレオーネの映画とは違い『ウエスタン』のオープニング・クレジットでは音楽が流れない。その代わりに別の音楽が使われる。風車の軋む音、鳥籠の鳥の声、電信のカタカタという音、ノイズが音楽を奏でるのである。アル・ムロックは指の関節を鳴らし、黒人俳優ウディ・ストロードの帽子には天井から水滴が滴る。モリコーネの神々しい音楽とは別に、雑音という音楽が異様なリズムとサスペンスを醸しだす。そして、駅員を閉じ込めたジャック・イーラムが、口に指を当て「しぃー」と黙ることを強いる。静寂に耳を傾けろという警告である。ガタガタとドアが閉められて画面が暗くなり、「セルジオ・レオーネ・フィルム」の文字が横から列車のようにでてくる。完璧な始まりだ。

三人の男たちはハーモニカを待っている。電信がカタカタと雑音を立てるが、一人の男（ジャック・イーラム）が電信を引きちぎると、その音は消える。イーラムの顔に蠅がたかる。蠅を拳銃の銃口に入れてイーラムはその音を聴くのである。これは『キートンの酋長』（バスター・キートン、1921年）からの引用である。銃口に閉じ込めると蠅の雑音は一瞬消え、静寂が戻る。緊張感が張り詰め、イーラムがにやりとする。ちなみに、ホラー映画の巨匠ダリオ・アルジェントはこの蠅のシーンを自分の案だと主張した。被害者の網膜に映っていた四匹の蠅が犯人の手掛かりになる『四匹の蠅』（1971年）、蠅と交信する少女が死体が隠され蛆虫が湧いた地下の水に落ちる『フェノミナ』（1985年）など、たしかにアルジェントは蠅や蛆虫に縁がある。だが、このシーンは『夕陽のガンマン』の刑務所で夜に囚人が顔にたかる虫を潰すシーンの反復である。

６．レオーネの詩学―反復、神話、風景

レオーネは自分の過去の作品を引用し、それを反復する監督である。『ウエスタン』のオープンニングは、『続・夕陽のガンマン』で卑劣な奴（イーライ・ウォラック）を三人のガンマンが襲撃する冒頭の反復だった。『続・夕陽のガンマン』『ミスター・ノーボディ』の冒頭で犬が横切るのは、『用心棒』の荒廃した宿場町で人間の手をくわえて走り去る犬への言及だろう。『荒野の用心棒』では犬に代わり「さよなら皆さん」と背中に紙を張って町から逃げだす男が登場し、音楽でコヨーテが吠えるのは『続・夕陽のガンマン』だ。また、レオーネの遺作で229分のギャング映画『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』（1984年）でも、主人公ヌードルス（ロバート・デ・ニーロ）を追って長いコートを着た三人の殺し屋が現れ、カメラは一人の男の手から顔へと向かう。後述する『ウエスタン』のウディ・ストロードの足から顔へとカメラが向かうシーンを反復するのである。一人のギャングが阿片窟にいる女の乳首に銃口を押しつける。イーラムが蠅を銃口に入れるシーンの反復だろう。三人の敵がやってくるオープンニングは『続・夕陽のガンマン』『ウエスタン』『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』と、三回反復されたことになる。

三人の敵と対決する冒頭は『ミスター・ノーボディ』でも再現される。伝説のガンマンであるジャック・ボレガード（ヘンリー・フォンダ）が髭を剃るために床屋に入ると、三人の敵が彼を狙う。『ミスター・ノーボディ』は『ウエスタン』のパロディ的作品で同様のシーンが再現されるのである。『ウエスタン』のフランク（フォンダ）は兄の仇を討とうとする謎の男ハーモニカにつき纏われるが、逆に『ミスター・ノーボディ』では殺された兄弟のことを探っているボレガード(フォンダ)は、彼を倒して「名」を上げようとするノーボディにつけ回される。両作品でフォンダが殺した人間の「名前」が読みあげられる。そして、ボレガードは150人の無法者の集団ワイルドバンチと対決する。『ミスター・ノーボディ』の題名は、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』を踏まえている。『オデュッセイア』で一つ目の巨人ポリュペーモスに名前を聞かれたユリシーズが「私の名前が知りたいのだな。私の名前はノーボディだ」と答えたように、ノーボディも竹馬に乗った小人と遭遇する。マカロニ(欧米ではスパゲティ)の名の通り、西部開拓というアメリカ神話のパロディ的存在だったマカロニ・ウェスタンには、1970年代にコメディ調の作品が増えるが、『ミスター・ノーボディ』はコメディであるものの、さらなる次元に飛翔した。

150人のワイルバンチが馬で疾走するシーンには、ワーグナーの「ワルキューレの騎行」をもじったエンニオ・モリコーネの曲が流れ、叙事詩や神話の領域にまで広がる。また、ワイルドバンチという名、サム・ペキンパーの墓、ノーボディの列車強奪は、サム・ペキンパー監督の『ワイルドバンチ』（1969年）の引用である。『ワイルドバンチ』の四人のワイルドバンチと政府軍の銃撃戦をスローモーションで捉えたクライマックスで、首領パイクはショットガンで鏡を割るが、ボレガードが三人の敵を射殺する冒頭でも、倒れてゆく敵がスローモーションで破損した鏡に映される。最後にノーボディとボレガードが対決し、『ウエスタン』のフォンダと同じポーズでボレガードが倒れる。だが、それはボレガードが死んだことにして欧州に逃がす芝居だった。外輪船「大統領号」が通り過ぎるのを眺める船上のボレガードから、ノーボディに手紙が送られる。そこには「西部の伝説を君のやり方で良いから絶やさないでくれ」と書かれていた。『若き日のリンカーン』(ジョン・フォード、1939年）でフォンダはリンカーンを演じたが、これはフォードからレオーネに手渡された西部劇という消えゆくジャンルへの哀悼の手紙だ［フレイリング391－３頁］。

『ウエスタン』の駅では長いコートを着た三人の男の顔が大きく映しだされる。レオーネ作品では言語の違いから台詞を減らし、顔のクローズアップを多用し、台詞ではなく無言の表情で内面を表現することを試みた[6]。『ウエスタン』では一部をユタ州からアリゾナ州にかかる巨大な岩山の土地モニュメント・バレーで撮影をしたが、それに劣らず俳優たちの顔という「風景」も迫ってくる。モニュメント・バレーは第二次世界大戦開始の1939年に公開された『駅馬車』(ジョン・フォード）において、巨体な体躯でアメリカの象徴となったジョン・ウェインと共に有名になった。町に来たジルは馬車に乗りモニュメント・バレーを通過し、農場に向かう[7]。また、戦時中にフォードは、ミッドウェイ海戦を撮影し、『ミッドウェイ海戦』（1942年）『真珠湾攻撃』（1943年）を完成させた「海の男」でも

あり、彼の描く「モニュメント・バレーは多島海のような印象をあたえる」[川本156頁]。海のように広大なモニュメント・バレーは戦後、『アパッチ砦』（1948年）に始まるフォードの騎兵隊三部作で、アメリカの「崇高」な「風景」として「再発見」されたのだ。これに対して『ウエスタン』は汚れた顔という風景を「再発見」したのである[8)]。

この三人の一人が黒人俳優ウディ・ストロードであり、銀幕全体に彼の黒い顔が映されて映画が始まる意義は大きい。なお『続・夕陽のガンマン』はアル・ムロックの顔のアップで始まる。長いコートのストロードはウィンチェスター銃を短く切って「改造」し、発射時の反動の強さから「メアズ・レッグ（牝馬の足）」と呼ばれた銃を腰に下げている。これはTVシリーズ『拳銃無宿』（1958－61年）で賞金稼ぎランダル（スティーブ・マックイーン）の愛銃だった。ストロードの「メアズ・レッグ」はジョン・ウェインの『リオ・ブラボー』のウィンチェスターM1892型の改造版（カスタム）である。ストロードは白人の伝統を「改造」してみせた。1970年代には黒人を起用したブラックスプロイテーション映画が流行したが、ストロードはその先駆けだ（タランティーノはブラックスプロイテーションのスター女優パム・グリア主演で『ジャッキー・ブラウン』（1997年）を制作している）。ストロードを継承して、ブラックスプロイテーション映画『ボス・ニガー』（ジャック・アーノルド、1975年）では黒人保安官ボスが「メアズ・レッグ」を使い、その姿は『黒豹のバラード』（マリオ・ヴァン・ピーブルズ、1993年）の黒いロングコートの黒人ガンマンに繋がっている。

ウディ・ストロードは元運動選手だけあって筋骨隆々の身体をしている。『プロフェッショナル』（リチャード・ブルックス、1966年）の冒頭で、囚人を保安官事務所に連れてくる彼は、ベストの下の筋肉隆々の裸体を見せつけ、その後にベッドシーンで登場する主役バート・ランカスターの裸体を凌駕してみせた。『バファロー大隊』（ジョン・フォード、1960年）において、ストロードは強姦殺人事件の容疑をかけられた軍曹を演じて無実を「語る」が、『黒豹のバラード』の冒頭でも「カウボーイの三人に一人は黒人だった」と、現代の記者に隠された西部の黒人の歴史を「語る」ナレーターを務めている。『黒豹のバラード』のエンド・クレジットの終盤にも『ウエスタン』の長いコートとストロードの姿が登場する。レオーネの「スロー」な美学で映しだされたストロードの姿は、ラップ音楽の流れる「早い」テンポの『黒豹のバラード』で蘇ったのである[9)]。それはタランティーノの『ジャンゴ　繋がれざる者』（2012年）の黒人ガンマン・ジャンゴに続いてゆく。

おわりに―ホロコーストはなかった？

『ウエスタン』で登場人物はジルを残して皆消えてゆく。ハーモニカ、シャイアン、フランクという三人の男は、ジルを中心に「回転」したのである。冒頭で風車も軋んで「回転」していたが、最後に掲げられるタイトル『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウェスト』もスクリーンを「回転」し消えてゆく。レオーネは過ぎ去った西部という「時代の終焉」をノスタルジックに描いた。タランティーノは2019年の日本でのリヴァイバル時の予告編に、「『ウエスタン』を見て映画監督になろうと思った。この作品を見ること自体が自分にとって映画学校だった」と、言葉を寄せている。テート殺害事件が起こり、時代が転換

する1969年のハリウッドをタランティーノは『ワンハリ』で幸福に紡ぎ直した。悪夢を夢のおとぎ話に変えたのである。「昔々…で(ワンス・アポン・ア・タイム・イン)」と『ワンハリ』でもポランスキー邸宅の扉が開き最後にタイトルが上るが、二つの映画は消え去った西部とハリウッドへの追悼の「おとぎ話」にほかならない。『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』の最初にヌードルスは「影絵」が映される阿片窟で阿片を吸っていたのが思いだされる。映画は横になり阿片を吸った後、上を向いた彼が微笑む姿で終わる。苦悩に満ちた彼の人生は阿片で見た夢だった。これは映画史上最も壮大な229分の夢オチではないのか。

タランティーノは頻繁にインタビューでアメリカでも先住民と黒人に対してホロコーストがあったと語っている。『ワンハリ』はホロコーストとは無関係だが、シャロンの夫のポランスキー監督はポーランド系であり、ナチスの強制収容所で妊娠中の母親を虐殺され、マンソン・ファミリーにも妊娠中のシャロンを刺殺されている。ポランスキーはホロコーストを二度体験したようなものだ。2023年は関東大震災時に朝鮮人のホロコーストが起きた百年目にあたり、『福田村事件』(森達也、2023年)が制作されたが、今でも様々な歴史で「ホロコーストはなかった」と歴史修正派は主張する。だが、これまでのリアリティを求めたマンソン映画とは異なり、ポスト・トゥルース時代の『ワンハリ』において、タランティーノは歴史を幸福に修正した。マンソンによる「ホロコーストはなかった」とシャロンたちは助かり、逆にマンソン・ファミリーたちはリックに火炎放射器で焼き殺されて「ホロコーストに処される」(ヒトラー崇拝者のマンソンは後に鍵十字を額に刻んだ)[10]。その名を知らしめた『パルプ・フィクション』(1994年)において、直線的はずの映画の進行を時系列を入れ替えて繋ぎ、「ストーリー」の時間軸の解体を試みたタランティーノは、『ワンハリ』で「もうひとつのヒストリー(おとぎばなし)」を織りあげたのである(以下次号に続く)。

註

1)『ローズマリーの赤ちゃん』については拙論を参考。なお本稿は日本アメリカ文学会・第60回全国大会のシンポジウム「ホラーの機能―恐怖のフィクションは<アメリカ>の何を表象するのか」(2021年10月3日オンライン開催)を原案とする。

2)失踪後のビアスの行方は、グレゴリー・ペックがビアスを演じた三角恋愛関係映画『私が愛したグリンゴ』(ルイス・プエンソ、1989年)、藤子・F・不二雄のコミック『T・P・ぼん』の「超空間の失踪者」(1979年)でも描かれた。

3)1960年の『ミステリー・ゾーン』の「ヒッチハイク」から二年後、『恐怖の足跡』(ハーク・ハーヴェイ、1962年)は、川に転落した車から生還したメアリーが奇怪な人々に遭遇するが、彼女はその事故で死んでいたという物語である。飛行機に形を変えた同様な話は、『ジャンボ・墜落／ザ・サバイバー』(デヴィッド・ヘミングス、1981年)でも使われる。墜落したジャンボ機の唯一の生存者であるパイロットに奇妙な現象が起き、女性霊媒師と共に事故の真相を追求するが、彼は既に事故で死亡していた。飛行機事故の生存者のはずの主人公が実は死んでいたという物語は、『ソウル・サバイバー』(トム・エバハート、1984年)や『パッセンジャーズ』(ロドリゴ・ガルシア、2008年)でも展開する。幽霊オチは「世にもありふれた物語」と化したが、それでもやはり面白い。福澤撤三の怪談小説「屍の宿」(『死小説』収録、2002年)では、古びて接客態度も悪い宿に泊まった不倫中

の男女が恐怖を体験するが、二人が心中した幽霊だったという結末は、幽霊オチを捻った都筑道夫の「はだか川心中」（『17人の死神』収録、1972年）においてタイムループに陥り温泉宿で心中を繰り返す二人が無事にループを抜けだす最後を、原点の幽霊オチにループを戻した短編である。

4）シャマランは『シックス・センス』の「既に死んでいた男（ブルース・ウィリス）」のテーマを捻って、『アンブレイカブル』（2000年）を制作した。『ジャンボ・墜落／ザ・サバイバー』が元ネタとされる『アンブレイカブル』では、乗客131人が死亡した列車事故の唯一の生存者のデヴィッド（ブルース・ウィリス）は、自分がこれまで怪我をしたことがないことに気がつく。主人公が同じブルース・ウィリスであるので、彼は既に死んでいるのではないのかと思わせるが、彼こそ文字通り「不死身（ダイ・ハード）の男」としてのスーパーヒーローだった。シャマランは『アンブレイカブル』の後、『スプリット』（2016年）『ミスター・ガラス』（2019年）と、スーパーヒーロー三部作を完成させた。

5）不老の身体を得た近未来を描く清水義範のミステリー『二重螺旋のミレニアム（遺伝子インフェルノ）』（2000年）には、壁を越えれば雷竜に襲われる言い伝えのある村で、人々が外の近代世界の秘密を隠して昔ながらに生きる「ヴィレッジ」という章がある。また山下和美のコミック『ランド』（2014－20年）でも、50歳で死を迎えると「あの世」にゆく掟の「この世」の村に住む少女が、彼方の「あの世」にある不老の秘密に向き合う。

6）『イングロリアス・バスターズ』は様々な外国語が飛び交う多言語映画であり、『ワンハリ』でリックはマカロニ・ウェスタンの台詞を後で吹き替える手法を馬鹿げているという。

7）駅から町へ入るジルをカメラが屋根を超えて捉えるシーンは、『バック・トゥ・ザ・フューチャーPART３』（ロバート・ゼメキス、1990年）において、モニュメント・バレーで先住民に襲われたマーティンが町に入るシーンで引用された。

8）CGIアニメーション映画『ランゴ』（ゴア・ヴァービンスキー、2011年）では、「ジャンゴ」をもじったカメレオンのガンマン「ランゴ」が砂漠の町で水を独占する陰謀に立ち向かう。ランゴが三匹の動物と対決する場面で、敵の指が鳴らされ風車が軋むのは『ウエスタン』の引用である。周囲に合わせて「変色」できるカメレオンの成長物語であるこの映画で、ランゴは西部の精霊として『荒野の用心棒』の「名無し」の男と出会い、新たな自分に「変身」を果たす。イーストウッドのCGIのリアルな顔が不気味だが、リアルな表情の汚い動物たちも含め、マカロニ・ウェスタンの汚い男たちの顔へのオマージュでもある。

9）『トイ・ストーリー』（1995年）シリーズで、スペースレンジャー人形バズ・ライトイヤーが来たために飽きられる不安を抱くカウボーイ人形の名前ウッディは、ウディ・ストロードに由来し、『スターウォーズ』（1977年）の登場で衰退した西部劇というジャンルを意味する。

10）額の刺青は最初Xで社会や自己からの離脱を意味するEXITだが、後に鍵十字になる。

引用文献

川本徹『フロンティアを超えて―ニュー・ウエスタン映画論』森話社、2023年。

クリストファー・フレイリング、鬼塚大輔訳『セルジオ・レオーネ―西部劇神話を撃ったイタリアの悪童』2000年、フィルムアート社、2002年。

戸川木純「『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウェスト』について今思うこと」岡村尚人編集『ビバ！レオーネ／セルジオ・レオーネ讃！』JRC、2019年。

西山智則「『ローズマリーの赤ちゃん』論―ロマン・ポランスキーにおけるジェンダー・人種・ホロコースト」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇20号』埼玉学園大学、2020年、29-42頁。

Conrad, Mark. “*Kill Bill*: Tarantino’s Oedipal Play,” *Quentin Tarantino and Philosophy: How to Philosophize with a Pair of Pliers and a Blowtorch*. Edited by Richard Greene and K. Silem Mohammad, Open Court, 2007, pp.163-75.